

日本語における二格の起点用法に関する認知言語学的分析

菅井三実
兵庫教育大学

要旨

本稿の目的は、現代日本語の二格における起点用法の振る舞いを考察の出発点とし、カラ格との交替が意味役割[動作主]としての解釈可能性に依拠しないことを示した上で、二格のスキーマの意味からカラ格との交替現象を説明できることを示すとともに、本稿が提案する分析の妥当性を例証することにある。

問題となる交替現象は、例えば、「太郎が先生に本を借りた / 太郎が先生から本を借りた」のようなもので、先行研究では、起点 NP の「先生」が[起点]であると同時に[動作主]でもなる場合に交替が成立するとされてきた。したがって、起点 NP が、例えば「図書館」のように[起点]であっても[動作主]でないときは、「?? 太郎が図書館に本を借りた / 太郎が図書館から本を借りた」のように二格で標示することはできないというのが、柴谷(1978)や Kabata and Rice(1997)などの分析であった。

しかしながら、先行研究には2つの不備を指摘しなければならない。1つは、起点 NP が[動作主]にならないときでも、二格で標示できるケースが観察される点である。例えば、「太郎が銀行に資金を借りた / 太郎が銀行から資金を借りた」において、「銀行」は[動作主]ではないのに二格で標示することが可能である。2つ目は、起点 NP をカラ格で標示できないケースが観察される点である。例えば、「太郎が家主さんに部屋を借りた / ?? 太郎が家主さんから部屋を借りた」において、「家主さん」をカラ格で標示することはできず、こうした現象を従来の分析は説明することができなかった。

この現象に対する本稿のアプローチは、[起点]の二格標示にはガ格 NP から起点 NP へのエネルギー伝達(働きかけ)が含まれることに着目し、問題の交替現象が、起点 NP の語彙的意味に帰着されず、行為主体(ガ格 NP)や移動主体(ヲ格 NP)を含む出来事全体に対する解釈(construal)と二格のスキーマの意味の相互作用によって説明できることを示すものである。

1 はじめに

本稿は、現代日本語の二格に見られる起点用法を考察対象とし、先行研究に批判的な検討を加えながら、把握事態に対する言語話者の解釈(construal)と二格のスキーマの意味から説明できることを示すものである。

以下において、次の第2節では、本稿が取り上げる現象を概観し、先行研究における問題点を2つ指摘する。第3節で問題の現象に対する新しい分析案を提示し、第4節において、様々な例を検討することで、周辺的な現象を含めて本稿の提案する分析の妥当性を例証す

る。

2 問題の所在

本稿が問題として取り上げるのは、現代日本語における二格の起点用法であり、動詞が「借りる」「もらう」「聞く」のような他動詞のとき、次の(1)に示すように、カラ格との交替現象が観察される。^[1]

- (1) a. 太郎が先生に本を借りた。
- b. 太郎が先生から本を借りた。

この現象が特異なのは、二格が本来的には[着点]を表すという前提に立つとき、(1a)の二格が表す起点の用法が本来的な[着点]の用法とは対義的な意味だからである。二格とカラ格が対義的な概念として用いられることを考えると、両者が交替するのは奇妙なようにも思われるが、この現象に関しては、すでに池上(1981:121-170)や Ikegami(1987)によって、場所理論の立場から《起点<着点》の非対称性として論じられ、[起点]の二格は[着点]が一方向的に転用されたものと分析されている。^[2]

同様の現象は、動詞「聞く」にも見られる。

- (2) a. 太郎が先生に詳しい説明を聞いた。
- b. 太郎が先生から詳しい説明を聞いた。

動詞が「聞く」の場合でも、二格で標示された「先生」は「説明」という情報の移動における起点と解釈することができ、カラ格との交替が認められる。

ただし、この用法には一定の制約があることも知られており、次のように、二格で標示できないケースもある。

- (3) a. ?? 太郎が図書館に本を借りた。
- b. 太郎が図書館から本を借りた。

(1)や(2)では「先生」を二格でもカラ格でも標示することができたが、(3)では「図書館」を二格で標示することはできず、カラ格でなければならない。(1)(2)および(3)のような現象に対し、柴谷(1978:297-304)や杉本(1986:365-366)および Kabata and Rice(1997)は、起点 NP の「先生」と「図書館」の違いに着目し、起点 NP が[動作主]の意味役割を担うかどうかにかかわらず二格標示の成否を帰着させてきた。この分析を「動作主説」と仮称するとき、先行研究の分析は次のように定式化される。

- (4) 起点 NP は、基本的に「カラ」で標示され、同時に[動作主]であれば、「ニ」でも標示されるが、[動作主]でなければ「ニ」では標示できない。

これによれば、(1)や(2)の例で「先生」が二格で標示できるのは「先生」が「本」の[起点]であると同時に[動作主]でもあるからであり、(3)の例で「図書館」が二格での標示が許されないのは「図書館」が[動作主]になれず[起点]としてしか解釈できないためということになる。起点 NP が[動作主]であるかどうかは語彙項目ごとに一義的に決まるという点で、動作主説は客観主義的な分析であるといえる。

しかしながら、この動作主説には 2 つの不備がある。1 つ目は、次の例が示すように、起点 NP を[動作主]として解釈することが困難な名詞句でも二格での標示が許されるケースが観察されることである。

- (5) a. 太郎が銀行に資金を借りた。
b. 太郎が銀行から資金を借りた。

(5)の「銀行」は、[動作主]として解釈されづらいという点で(3)の「図書館」と変わりなく、[動作主]として解釈できるかどうかに関して両者を区別する理由はない。それにもかかわらず、(5a)のように「銀行」が二格で標示され得るということは、起点 NP が[動作主]としての解釈を持ち得るかどうかを二格標示の条件と考えることの誤りを示している。

2 つ目は、次のように二格での標示が可能でありながら、カラ格で標示できないケースである。

- (6) a. 太郎が家主さんに部屋を借りた。
b. ?? 太郎が家主さんから部屋を借りた。

従来の分析は、基本的にすべてのケースでカラ格の標示が可能で、動作主性が満たされたときにのみ二格での標示も可能になるという趣旨であったので、(6b)のようにカラ格で標示できないケースに対して、その理由を説明することができない。

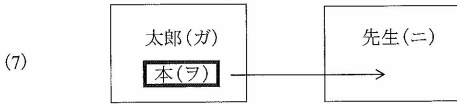
こうした現象を包括的に説明し得る分析を次節において提案したい。

3 他動詞構造における起点の性質

前節で挙げた現象を包括的に説明するため、本稿では、他動詞構造におけるガ格・二格・ヲ格の意味関係を確認するところから議論を始める。

本稿で問題にしている現象は、他動詞文で起こるものであるが、一般に、他動詞文において、ガ格 NP は典型的に変化を生じさせる始動者 (initiator) であって、変化を直接被るのはヲ格 NP である。言い換えれば、ガ格 NP が働きかけて、ヲ格 NP が二格 NP に向かって一体化の変化を起こすというのが「ガ-ニ-ヲ構文」の原型的な意味構造といってよい。この関係

は、例えば「太郎が先生に本を貸した」であれば、次のように図示できる。



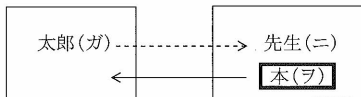
この図式は、当初「太郎」の領域(=左側の四角)に「本」があり、それが「太郎」によって「先生」の領域(=右側の四角)に移動する関係を表している。^[3] ただ、菅井(2007)で詳説されているように、二格 NP に対するヲ格 NP の関係には程度さがある。山梨(1994)が空間の二格について提案した《近接性》→《到達性》→《密着性》→《収斂性》という4つの認知的制約を援用すると、次の(8)に見られる二格とヲ格の関係も、おおむね、この軸に沿って整理することができる。

- (8) a. 針金を内側に曲げる。
 b. 壁にボールを投げる。
 c. 壁にペンキを塗る。
 d. スープに調味料を入れる。

この例で、(8a)における「針金」と「内側」の関係は、せいぜい「内側」に近づいているということでしかないわけだから《近接性》を満たす程度のもので位置づけられる。(8b)では「ボール」が「壁」に到着するというのがデフォルト的解釈であるから《到達性》のところに位置づけられ、(8c)では「ペンキ」が「壁」に到着した上に互いに切り離し得ない状態になるという点で《密着性》に位置づけられる。最後の(8d)では「調味料」と「スープ」が混ざり合って明瞭な区分がなくなるので、《収斂性》を満たしているといえることができる。いずれにしても、他動詞構文において、ヲ格 NP と二格 NP は、《近接性》→《到達性》→《密着性》→《収斂性》という非離散的な程度さをもちながら、基本的に「ヲ格 NP → 二格 NP」の方向に一体化していく関係が認められる。

本稿が取り上げている、「借りる」「もらう」「聞く」のような動詞を述語とする他動詞構造文でも、ガ格 NP は典型的に変化を生じさせる始動者 (initiator) であって、ヲ格 NP が変化を被る点では(7)とケースと変わらないが、その方向が逆になる点で特異である。つまり、移動主体「本」の移動は、「先生」→「太郎」の方向であって、「先生」は二格で標示されているにもかかわらず、移動の起点になるというものである。このとき強調したいのは「二格に対する方向性は保持される」という点であり、これが本稿の作業仮説である。^[4] ただし、二格に向かうのは、ヲ格 NP ではなく、ガ格 NP からの抽象的なエネルギー伝達であり、第2節の(1a)で挙げた「太郎が先生に本を借りた」でいえば、次のように図示できる。

(9)



この図式では、ガ格 NP の「太郎」からニ格 NP の「先生」に対する働きかけが右向きの破線(点線)で表されており、この点でニ格は[着点]の意味を保持しているが、それと同時に、ニ格 NP は、その働きかけを受けてヲ格 NP 「本」の移動における起点になる。

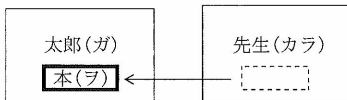
上の(9)に図示されるような起点のニ格標示の意味構造を整理すると、次の(10)のように定式化することができる。。

- (10) 起点のニ格標示は起点 NP への順方向的な“働きかけ”の局面が前提とされ“働きかけ”の局面と“受け取り”の局面を併せた全体をプロファイルするのに対し、起点のカラ格標示は逆方向的な“受け取り”の局面のみを前景化し、移動主体が起点 NP から離れている関係をプロファイルする。

この分析を「着点汎用説」と仮称するとき、第 2 節の(4)に挙げた動作主説が、起点 NP の語彙の意味によって客観主義的に決まるとされるのに対し、本稿が提案する「着点汎用説」は、事態に対する解釈 (construal) に依存する点で大きく異なる。

一方、問題の現象に関してニ格がカラ格と交替するとき、構文としては「ガ-ヲ-カラ」の構造をなすが、菅井(2007)で詳述されているように、他動詞文においてカラ格 NP はヲ格 NP との間に(乖離性)とも言うべき特徴を示す。第 1 節の(1b)で挙げた「太郎が先生から本を借りた」でいえば、次のように図示できる。

(11)



この図式は、移動主体の「本」は「先生」の領域にあり、それが「太郎」の領域に移動する関係を表している。このとき、「太郎」から「先生」への働きかけは前提とされず、「先生」を起点とする「本」の(抽象的な)移動の部分がプロファイルされるというのが本稿の分析である。厳密に言うと、移動というより、移動の結果「先生」と「本」が乖離した状態がプロファイルされることになる。¹⁵⁾

以上、この第 3 節では、第 2 節で指摘した現象に対して新しい分析を提示した。

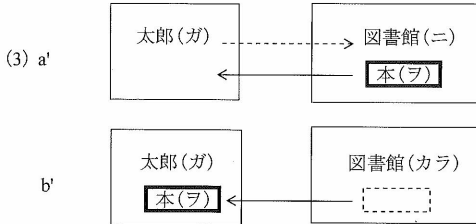
4 妥当性の検討

この第 4 節では、前節で提案した分析を様々な事例に応用して、その妥当性を検討する。

まず、第2節の(3)に挙げた現象は、次のようなものであった。

- (3) a. ?? 太郎が図書館に本を借りた。
 b. 太郎が図書館から本を借りた。

第2節の(4)に挙げた動作主説によれば、(3a)の容認度が下がるのは、「図書館」が意味的に[動作主]ではないためということになるが、本稿が提案する(10)の仮説によれば、(3)に対する説明は次の通りである。まず、(3)のペアにおいて「図書館」をニ格で標示できないのは「図書館」が図書の閲覧・保管・貸し出しを役割とする公共機関であって、あえて「図書館」に“働きかけ”をする必要がないためであり、本理論の用語で言えば「図書館」への“働きかけ”をプロフィールすることが不自然であるためと説明される。つまり、下の図式で言えば、「太郎」から「図書館」への破線の矢印部分が不自然であるためということになる。

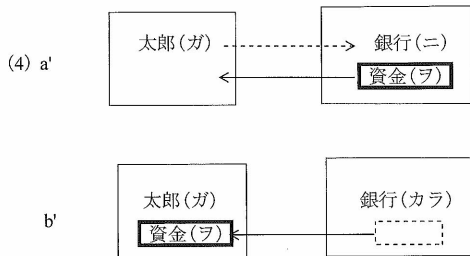


同時に、(3b)のように「図書館」がカラ格で標示されなければならない理由も明白であって、そもそも図書館に所蔵されている本を借りるとき、「本」は「図書館」から離れて外部に持ち出されるのが一般的であり、したがって、必然的に“受け取り”の局面がプロフィールされるためと説明できる。¹⁶⁾

次に、従来 of 分析にとって問題となる例として取り上げたのが(4)の例で、起点 NP が[動作主]ではないのにニ格で標示されるケースであった。

- (4) a. 太郎が銀行に資金を借りた。
 b. 太郎が銀行から資金を借りた。

(4)の「銀行」は、[動作主]として解釈されづらいという点で(2)の「図書館」と変わりなく、[動作主]として解釈できるかどうかに関して両者を区別する理由はない。それにもかかわらず、(4a)のように「銀行」がニ格で標示され得るということは、起点 NP が[動作主]として解釈されるかどうかをニ格標示の条件と考えることの誤りを示している。(4)の現象については、次のように図式化しながら説明を与えたい。

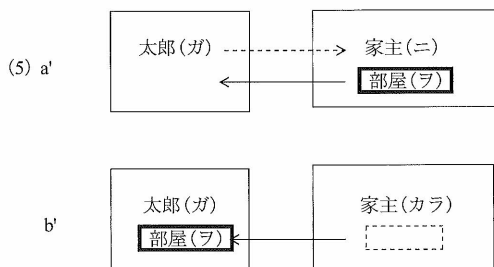


本稿が提案する(10)の仮説によれば、(4a)のように「銀行」が二格で標示されるのは、「銀行」に融資を希望する際には、借りる側からの「働きかけ」が必要だからであって、同時に、(4b)のようにカラ格での標示も可能なのは“働きかけ”の局面を背景化して「資金」が「銀行」から離れる“受け取り”の局面をプロファイルすることも可能であるためと説明される。

第2節で2つ目の問題として取り上げたのが(5)の例で、起点 NP をカラ格で標示できないケースであった。

- (5) a. 太郎が家主さんに部屋を借りた。
b. ?? 太郎が家主さんから部屋を借りた。

従来の分析は、基本的にすべてのケースでカラ格の標示が可能で、[動作主]性が満たされたときにのみ二格での標示も可能になるという趣旨であったので、(5)のようにカラ格で標示できない理由を説明できなかった。この(5)の例に対して、前節の(9)および(11)にならって意味関係を図式化すれば、次のようになり、その説明は下の通りである。



すなわち、起点 NP が二格で標示されるのは経験的に「部屋を借りる」というとき「家主さん」への働きかけが前提になるからであり、逆に、起点 NP をカラ格で標示できないのは、

仮に「働きかけ」を前景化しない場合でも「借りる」という事象によって「部屋」が「家主さん」から離れるとの解釈が不自然であるためと説明できる。賃貸契約において、「家主さん」と「部屋」が離れていくという変化は生じないからである。

以上の点に関して、少なくとも、あらかじめ[起点]であるか[起点+動作主]であるかが決まっていて、前者であればカラ格で標示し、後者であればニ格で標示するという客観主義的な分析は、記述レベルで間違っていると言わなければならない。

これに関連して、カラ格の乖離性が起点 NP の格標示に作用していることを例証しておきたい。次の2組のペアにおいて、いずれも起点 NP は「先生」であり、語彙的には一律に[+animate]であるが、格標示の可否は一樣ではない。

- (12) a. 先生にノートパソコンを借りた。
- b. 先生からノートパソコンを借りた。

- (13) a. 先生にデスクトップパソコンを借りた。
- b. # 先生からデスクトップパソコンを借りた。

(12)では、ニ格でもカラ格でも標示できるのに対し、(13)では、ニ格での標示はできても、カラ格での標示は許容しがたい。この現象を説明するのに、(5)のケースと同様、第2節の(3)で挙げた動作主説は機能しない。本稿のように、スキーマの意味の観点から言えば、他動詞におけるカラ格はヲ格との間に〈乖離性〉ともいうべき特性があり、カラ格標示の成否は〈乖離性〉との整合性に帰着される。すなわち、(12)のように移動主体が「ノートパソコン」であれば、賃借にあたって「先生」のところから持ち出しても不自然ではないのに対し、(13)のような「デスクトップパソコン」が語用論レベルでカラ格で標示できないのは、百科辞書的知識として「デスクトップパソコン」を借りると言うとき、元の場所で使うのが通常の借り方であって、「先生」のところから離れた場所に持ち出して使うことが不自然と理解されるためと説明できる。^[7]

最後に、ここまでの議論では動詞が「借りる」の場合だけを扱ってきたので、別の動詞として「もらう」の例にも触れておきたい。動詞が「もらう」であっても、本稿の(10)で挙げた仮説は有効であり、次の(14)のようにニ格とカラ格も交替が成立するケースと、(15)のように交替が成立しないケースを正しく予測する。

- (14) a. 先生に油絵をもらった。
- b. 先生から油絵をもらった。

- (15) a. ? 警察に感謝状をもらった。
- b. 警察から感謝状をもらった。

(15)において二格での標示が許容されないのは、「警察」が市民に「感謝状」を贈る際、市民が警察に“働きかけ”をして贈与されるものではないためというのが本稿の説明である。

5 結語

本稿は、他動詞文における二格とカラ格の交替現象について、二格およびカラ格に固有のスキーマ的意味と把握事態に対する解釈という観点から検討を加えた。本文で議論した内容は次のように要約される：

- [i] 他動詞文における二格とカラ格の交替現象は、起点 NP が[動作主]かどうかという語彙的性質によって一義的に決まるものではない。
- [ii] 他動詞文における二格にはヲ格との間で一体化していく関係が認められ、起点 NP の二格標示にもガ格 NP からの“働きかけ”という形で保持されるのに対し、他動詞文のカラ格にはヲ格との間に〈乖離性〉ともいうべき特質が認められる。
- [iii] 他動詞文における二格とカラ格の交替現象は、二格とカラ格のスキーマ的意味に基づき、把握事態に対する言語話者の解釈に帰着される。

このうち、[i]は客観主義的な意味観に立つ先行研究の不備を明らかにしたものであるが、[ii]が、本稿の主要な主張部分であり、二格やカラ格のスキーマ的意味に基づいたものであるが、いずれも二格やカラ格における一般的な意味であって、本稿で取り上げた現象だけに必要なアドホックな意味ではないことを強調しておきたい。[iii]は、本稿の分析を認知言語学的に性格づけたものであり、先行研究に対するアンチテーゼでもある。

なお、本稿で取り上げた二格とカラ格の交替現象に関連しては、受動文における二格の[動作主]標示の現象も説明の視野に入れなければならないところであるが、本稿で取り上げた現象が表面的には格の交替現象であるのに対し、受動文には助動詞「(ら)れる」の付加という有標の統語的操作が加えられる点で大きな違いがあり、同一の原理では説明できないものと思われる。受動文における二格の[動作主]標示については、稿をあらためて検討したい。

謝辞

本稿は、関西言語学会第 35 回大会(2010 年 6 月 26 日、京都外国語大学)における発表内容に加筆補正したものである。当日、有益なコメントをくださった井元秀剛氏(大阪大学)、小熊猛氏(石川高等専門学校)氏、野澤元(京都外国語大学)、三宅知宏氏(鶴見大学)ほかフロアの方々に感謝の意を示したい。ただし、本稿に誤解や不備があれば、すべて筆者一人の責任である。

注

- 1 このような動詞を Anderson(2006:370)や Kishimoto(2010)では、goal-subject verb と呼

んでいる。

- 2 本来[着点]を表すニ格が[起点]を標示し得ることについては Kumashiro(1994)も参照されたい。
- 3 形式的には「ガ-ニ-ヲ構文」の構造をもっているが、移動動詞(位置変化動詞)の場合、ガ格 NP が移動主体になり、「太郎が商店街を駅の方角に歩いて行った」において、移動するのはガ格 NP の「太郎」であって、ヲ格 NP の「商店街」に位置的な変化はない。
- 4 ニ格で標示された起点 NP への働きかけという着想は、堀川(1988)や岡(2005)にも見られるが、現象を説明する原理にまで定式化されていない。
- 5 他動詞構造においてカラ格NPとヲ格NPとの関係に〈乖離性〉が認められることは、次のようなペアによって確認できる。

- (i) 太郎が隣の部屋からロボットを操作した。
- (ii) 太郎が隣の部屋でロボットを操作した。

(i)のように、「隣の部屋」をカラ格で標示したとき、ヲ格の「ロボット」は「隣の部屋」にあるとは解釈できず、一義的に「ロボット」は「隣の部屋」以外のところにあると解釈されるのに対し、(ii)のように「隣の部屋」をヲ格で標示したとき、ヲ格NPの「ロボット」は「隣の部屋」にあるとも「隣の部屋」以外のあるところにあるとも解釈できる。

- 6 補足的に、本稿の提案する仮説の妥当性を示す事実として、起点 NP が「図書館」であっても、貸し出しにおいて特に“働きかけ”を必要とするケースでは「図書館」のニ格標示が容認される例を挙げたい。例えば、「他大学の図書館に貴重資料になっているマイクロフィルムを借りた」のような例では、「貴重資料になっているマイクロフィルム」を借りるには、通常とは別の手続きが必要であり、その上、「他大学」の研究者であれば「図書館」への“働きかけ”は無視できないものとなる。このとき、起点 NP のニ格標示が容認されるということは、本稿の提案する仮説の妥当性を支持するものと言ってよい。
- 7 (5)における「部屋を借りる」の「借りる」は、「トイレを借りる」と同じように、およそ「使わせてもらう」のような意味で解されるが、(12)や(13)は、文字通りに「借りて行く」の意味か「使わせてもらう」の意味なのか判然としないところがある。本講の分析であれば、動詞の多義を区別することなく、把握事態に対する解釈という観点から一元的に扱うことが出来る。

参考文献

Anderson, John Mathieson (2006). *Modern grammars of case: a retrospective*. Oxford University Press, Oxford.

- 堀川智也 (1988). 「格助詞『に』の意味についての一考察」『東京大学言語学論集'88』321-333.
- 池上嘉彦 (1981). 『<する>と<なる>の言語学』. 大修館書店, 東京.
- Kabata, Kaori and Sally Rice (1997). "Japanese ni: the particulars of a somewhat contradictory particle," In Verspoor, M.H., et al. (Eds.), *Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning*, pp.102-127, John Benjamins Publishing Company.
- Kishimoto Hideki (2010). "The Semantic Basis of Dative Case Making in Japanese The Semantic Basis of Dative Case Making in Japanese," *Kobe papers in linguistics*, 7, 19-39.
- 国立国語研究所 (1997). 『日本語における表層格と深層格の対応関係』, 三省堂, 東京.
- 国広哲弥 (1967). 『構造的意味論—日英両語対照研究』, 三省堂, 東京.
- Kumashiro, Toshiyuki (1994). "How the Goal can be the Source: the semantics of the Japanese Dative Marker Ni," *The twentieth LACUS forum 1993*. Linguistic Association of Canada and the United States; Makkai, Valerie Becker, 401-417.
- 林 璋 (1992). 「助詞の意義と用法の体系—格助詞『に』を中心に—」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学—その提言と建設』, 516-530, 三省堂, 東京.
- 岡 智之 (2005). 「場所的存在論による格助詞にの統一的説明」『日本認知言語学会論文集』5, 12-22.
- 柴谷方良 (1978). 『日本語の分析』大修館書店 東京.
- 菅井三実 (2000). 「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』20(2), 13-24.
- 菅井三実 (2001). 「現代日本語の『に格』に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』21(2), 13-23.
- 菅井三実 (2007). 「現代日本語における奪格の意味記述」『兵庫教育大学研究紀要』30, 49-58.
- 杉本 武 (1986). 「格助詞」奥津敬一郎・田沼善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』, 227-380, 凡人社, 東京.
- 山梨正明 (1994). 「日常言語の認知格モデル[6]—意味のモード」『言語』23(6), 104-109.

A Cognitive Linguistic Analysis of *Ni*-Marked Source NP in Japanese

Kazumi SUGAI

Hyogo University of Teacher Education

ABSTRACT

This paper aims to provide analysis of the dative/ablative (*nikara*) case alternation in Japanese to maintain that the alternation must not be ascribed to agency of the source NP, but to the conceptualizer's construal to the event as a whole.

The alternation discussed in this paper is observed when the verb is a goal-subject verb, like "kariru", (borrow), "morau" (get), "kiku" (hear), "narau" (learn) and others, as follows:

- (1) a. Taro-ga {sensei-ni / sensei-kara} hon-o karita.
Taro-NOM teacher-DAT / teacher-ABL book-ACC borrow(PAST)
"Taro borrowed a book from the teacher."
- b. Taro-ga {*toshokan-ni / toshokan-kara} hon-o karita.
Taro-NOM library-DAT / library-ABL book-ACC borrow(PAST)
"Taro borrowed a book from the library."

In this pair the source NP "sensei" (teacher) can be marked with the dative (*-ni*) case as well as the ablative (*-kara*) case. The previous literature analyses from the objectivistic point of view that the *ni*-marking is possible when the source NP is AGENT as well as SOURCE in its semantic role. The objectivistic analysis is invalid, however, because it cannot account for the cases in (2a) and (2b) below.

- (2) a. Taro-ga {ginkou-ni / ginkou-kara} okane-o karita.
Taro-NOM bank-DAT / bank-ABL money-ACC borrow(PAST)
"Taro borrowed money from the bank."
- b. Taro-ga {yanushi-ni / *yanushi-kara} heya-o karita.
Taro-NOM landlord-DAT / landlord-ABL room-ACC rent(PAST)
"Taro rent a room from the landlord."

In (2a) the source NP "ginkou" (bank) does not serve as ANGET, but is marked with the dative *ni*-case. In (2b), the source NP "yanushi" (landlord) cannot be marked with the ablative *kara*-case.

To explain the phenomena in (1) and (2) comprehensively, this paper proposes the construal-based analysis on the basis of the schematic meanings of the Japanese dative (*-ni*) case and the ablative (*-kara*) case as follows; the source NP is marked with the *ni*-case when the nominative-marked NP is construed as "appealing" to the source NP, whereas the source NP is marked with the *kara*-case when the accusative-marked NP is construed as away from the source NP.